

1 教育新時代に向かう「磐田の教育」の新興について

教育の目標として「磐田の教育・道しるべ」そして「磐田市教育大綱」が制定された。その“大綱”には“いのちを培う・誇りを培う・礼節を培う・敬愛を培う・感謝を培う・こころざしを培う」となっている。いつしか日本の伝統的な倫理・文化の概念が薄れてしまった反省が、この“道しるべ”“大綱”には込められていると感じる。そして打ち出された“学府一体校整備構想”と併せこれからの時代に沿う磐田の教育の方向が示されたと思料している。その理想の実現に向かう教育そのものの質・中身を変革する気構えが今必要と考え、以下、「磐田の教育」の新興について伺う。

(1) 社会環境悪化と深刻な青少年問題について

倫理観・道徳観の貧困から生ずる諸問題

オバマ大統領の広島演説の中で、「科学の進化と同様、m o r a l（倫理・道徳）の進化も求められている」という一節があったが、経済活動・社会活動においても同様で、倫理観・道徳観が薄れてしまったかと思う。その結果、金銭至上主義・学力偏重風土が蔓延して、知力と倫理力のアンバランスが起こす嘆かわしい不祥事が多発している。非正規雇用・格差社会拡大もそうした社会の産物なるも、こうした社会の負の影響が、子どもたちにどのように影響しているか、どんな形で現れているのか状況を伺う。

社会・家庭環境悪化と不登校状況

小中学校不登校児童生徒が全国的に増加している。文科省調査に見る平成26年度の数値は小中計122,897人となっている。磐田市も205人で増加傾向である。平成26年度の生徒数1,000人に対しての比較では、全国が12.1人、静岡県13.3人、磐田市14.6人となっている。家庭環境悪化の影響もあるであろう。市の支援機関である「磐田市教育支援センター」ではどのような対応をして復帰を目指しているか、効果はどうか、課題としてはどのようなことがあるのか伺う。

ひきこもり者支援対応と予防的対応

「2016年度版子ども・若もの白書」によれば15歳～39歳のひきこもり者推計値は69.6万人。「県ひきこもり支援センター」の推定値は、県内7,000人、磐田市300人ということなるも、これは厚労省の数値ベースということで、上記白書ベースではこの倍以上の数値が想定される。本年3月に報告された2015年の全国ひきこもり家族会連合会の調査結果による平均年齢は34.1歳、ひきこもり期間平均10.8年、親の平均年齢62.8歳となっており、この数値を知るだけでもご家族の悲惨さは想像できる。又、初発年齢は12～20歳代が生じやすくひきこもり者の多くは不登校を経験しているとのことである。とすれば不登校の予防的対応の支援教育が重要であり、それは、ひきこもりを予防することに繋がるということになる。当局のひきこもり者に対する支援の状況を伺う。また、不登校の予防的取り組みについて見解を伺う。

(2) 今後の磐田市の教育新興について

自然体験活動の充実・施設の整備

不登校の復帰支援対応を参考に、コミュニケーション力をつけ、自立心を育てるべく「自信」を持たせる教育が必要であり、それには豊富なイベント、自然体験活動が有効と思料する。下記2事項を提起する。

ア 旧豊岡東小学校を野外活動センターとして活用

浜松市の現状等を参考にし、閉校となった豊岡東小学校をキャンプ等が出来る野外活動センターに転換したいもの。周辺には、敷地川・獅子ヶ鼻公園・トレッキングコースがあり、近くに豊岡東交流センターもあり協働も可能。野外活動のメッカになる要素がそろっている。見解を伺う。

イ 兎山公園を「磐田版 森のようちえん」として活用

自然の中で屋外体験活動を通じて心身を育む「森のようちえん」が各地に広がりを見せている。兎山公園は緑いっぱいであり4年後にはすぐ前にJR新駅が出来る。市内の幼稚園・こども園が利用する「森のようちえん」の拠点として活用することの検討について当局の見解を伺う。

「心の教育・徳育」の重視

ウルグアイの元大統領ムヒカさんが来日し、日本の若者たちと対話して、衝撃的な感動と忠告をされていった。我々も「豊かさとは何か」「人生で大切なことは何か」を学び直すとすれば、それは「磐田市教育大綱」に沿い人間教育をやることに通じることと思う。知育・徳育・体育のうち「徳育」について知育の前に出るほどの変革が必要な時と思うのである。心のひ弱さの克服、多彩な働き方の体験的学び、「もったいない」「足るを知る」等の日本の文化等も少年期に学ばせたいものとする。遺伝子研究の第一人者村上和雄筑波大名誉教授は、人間の持つ60兆もの細胞にある遺伝子情報のうち使われている遺伝子は5%のみだけで、その遺伝子のスイッチをオン・オフに切り替えるのは自分の心であり意思であって、うれしい、わくわく、感動、感謝といった陽気な心が体に良い遺伝子のスイッチをONにすること。ここに心を豊かにする教育のヒントがあると思ったものである。こうした「心の教育・徳育」についての考え方、これからの方向について当局はどのように考えているかを伺う。

運営は地域や社会の力を借り連携して対応

上述した「野外活動センター」や「森のようちえん」を活用しての自然体験活動の教育や心の教育のような、幼年・少年期の時に大切な教育は、家庭の教育力が弱まってしまった現在は、新時代を迎える磐田市9年間の義務教育の中に是非組み入れてほしいと考える。そうした教育事業の運営については、中学校部活の例と同様に外部委託を考え、連携する方向で考えれば運営方法が見えてくると思料する。地域社会には引き受けてくれるNPO法人等は近くにしよう。当局の見解を伺う。